

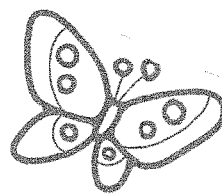
ひまわりからの メッセージ

135号

2023. 1. 16.

NPO ひまわりの花内
西濃園域
発達障がい支援センター
発行人: 中野にみ子

初春を 迎えて



クリスマスの日、わが家にまた冬の蝶が迷い込んできました。二年前には親友の命日に紋白蝶が、今回は教え子の命日でしたが、どうしてこの時期に……と不思議でなりません。かの世から「ちゃんと憶えててくれている？」と姿をかえて訪ねて来たのかもしれません。白い翅をたんと玄關に横たわっているのを偶然見つけたのです。飛ぶ元気もないようでしたが、水分が欲しいかもしれないと思って、他助の花を三輪ほど近くに置いておきました。翌朝には他助の花の上にのぼっていました。生あるものが家の中にいると気になって何度も様子を見に行くことになり、数日を蝶と共に過ごしましたが結局新年を迎えることはできず、シクラメンの花の上で命を終えました。

そんな師走が過ぎ、新年を迎えると、今年も今までかわった子どもたちの近況を知らせる年賀状がたくさん届けられてきました。

就職してずっと仕事をしているＴさん、大学生になったＭさん、四月から留学するＪさん、就職先から辞職を勧められているＳさん、病氣入院していたＨさん……その一枚一枚を見ながら出会った頃の幼い姿が思い出されます。つま先立ちで歩いていたなあ。この子は触覚過敏で学園の中庭の芝生に足が下ろせなかった。この子はボディペインティングを喜んでしゃべっていた。小学校では支援級で、お店やさんに興じていた子もいれば、自分ルールを崩せずに先生に叱られていた子、暴れてガラスを割ってしまったこともあった等々思い出が尽きることはありません。皆それぞれの人生を歩んできて、結婚して子になった人もいれば、独身の方が気楽だと独り身を通す人もいます。幼くして亡くなった子のお母様からの近況報告もありました。

年齢を重ねて来ると、こうしてかわった子どもたちの近況を知ることが嬉しいことですが、しかし、賀状も出せずに苦しんでいる家族の方々も多く、新春早々のメールや電話に心が痛みます。遠い日々のアルバムを繰りながら、かわってきた子ども達の偉せを祈らずにはいられません。今年こそ佳き年となります様に。

検査について考える

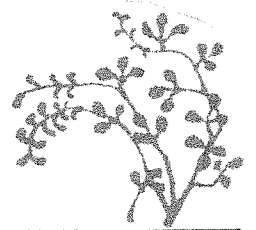
検査は誰のために？

何のために？

今回は検査についての疑問を皆さんと一緒に考えてみたいと思つてペンを執りました。

今年度四月から十二月末までに私が行った検査は実に100件を越えました。この間、百人の子どもたちに出会い、百人の保護者の方に出会い、そして先生方には百五十名以上の方々にお目にかかつてきたと思います。そういう中で私は本当に子どもたちの役に立っているのだろうか、検査をすること、その結果をお知らせし、次の手だても模索すること、子どもたちの幸せにつながっているのだろうか、保護者の方々や本人にプラスになる助言ができたのだろうか、困惑と苦しみを与えたにすぎなかったのではないかと……そして検査依頼をして下さる方々は、何のために、どんなことを期待していらっしゃるのだろうか、最近そんなことを考えることが多くなったのです。

皆さんもどうか一緒に考えてみて下さい。



検査は万能ではありません!!

今までにも何度も書いてきましたが、検査というのは一つのツールにすぎません。WISCを実施すれば全てがわかるというものではないのです。ところが数字のみが一人歩きしてしまつて、個人内差が大きいにもかかわらず全IQの数字のみで教育支援委員会の資料に出されてしまつたり、就学の判断のためだけに検査をするということも行われているように思います。検査は万能ではありませんし、検査後にそのお子さんの家庭での接し方や学校の支援に役立ててもらつてはじめて有効だと言えるのではないのでしょうか。

検査依頼にも色々なケースがあります。学校での様子を文書にして、あらかじめ担任との話し合いの場を設けて下さっている学校もあれば校外の専門家が検査が必要だと言われたのでお願いしますというケースもあります。児童生徒が何に困っているのか、何を目的に検査をするのかも知られず単に検査を……というケースもあります。心理師は検査屋ではありませんから、一時間半前後の検査の中でそのお子さんを観察し、結果を出し、保護者の方と先生方にお話させていただくわけです。「まるで毎日見ていらっしゃるようですよ」「何故そんなことまでわかるのですか」等々、まるで占い

が当たったかのようにおっしゃって下さる方もありますが、どういふことなのかと考えると考えてしまいます。もしかしたら、検査したってどうってことないでしょう、わかりつこないでしょうと信じていらつしやらないのか、それとも私自身が試されているということなのかと思ったりします。

事前に実態を教えてもらわなくても、検査の中で見えてくるその児童の特性や困りはあります。けれども結果説明の時の保護者の方へのアドバイスや先生方に提案させていただいたことかどの様に活かされたのか、又は役に立たなかったかを私が知る機会には本当に少ないのです。もちろん事後に「先生のアドバイスで、お母さんががんばっておられますよ」とか「学校でもやってみています」等と報告して下さることがあったりすると、単純に喜んだりしています。

検査は誰のために？



もちろん、検査は本人のために行うのであって、学校で困るから支援学級を勧めるために行うものではないはずで、今、私たちはインクルーシブな共生社会を目指しているわけで、昔のようにエロの値によって知的な発達段階を決めているのではない筈なのです。少し発達の弱さは見られるものの生活力もあり人関係にも特に困りがない生徒にあえて知的障がいレッテルをはる必要はない

でしょう。療育手帳を取得して特別支援学校へ進むというのであれば私のような心理師ではなく子ども相談センターの心理師の検査を受けることが先決ですし、親さんの希望がある」という理由であれば医療機関での検査を受けるように勧めていただく方が良いと思います。

子どもたちのことを一番よく知っているのは、日々子どもたちと共にいる学校の先生方でしょう。私は、先生方が「この子の困りについて、より深く理解して対応したい」とか「この生徒の将来の自立に向けて保護者と共通の理解をしていきたい」など、子どもたちのメリットになるように考えて検査を受けた方が良いと思っただけのことには協力を惜しみたくないと思っています。子どもたちの出来ないことをさらに暴きだしてレッテルをはっていくようなことはしたくないのです。外部の人に指摘されただけではなく、学校で毎日かわって下さっている先生方に判断していただきたいと思っています。この子のために何かプラスになることはないか、今までも支援してきたが、具体的に少し視点を変えて有効な方法はないか、保護者と協力しあって子育てをしていくために、どの様な話し合いが必要なのか……そんな困りに対して、一緒に考えさせていただけたら心理師としてこんな嬉しいことはないのです。

人間は数字で表されると、それが唯一の真実であると思いがちです。DSM-5（アメリカ精神医学会）の診断基準

でも、IQのみで判断しないと記述されています。私たちもそろそろ数字の束縛から子どもたちを解放しませんか？

WISCはIQのみで判断しないことに特徴があり、良さもあると思います。言語理解は高く、自分ではできるはずだと思っているのに処理速度の値との差が大きいお子さんは、実行機能が上手いかわなくて苛立ち、先生方から見ると困った行動に出ることもあるでしょう。

言語理解に落ち込みがある場合、語い数の少なさが表現力の稚拙さにつながり、日常生活場面での行動に現れてしまふこともあるでしょう。語いはたくさん知っているけれども言語的推理といふことはから想像を広げていく力の弱さがあると、言外の意味が分かり難く、「意味がわからない」という状況に陥ってしまうことが多々あるでしょう。

また、語い数の少なさは日常会話の少なさからきている場合もあり、本人の話をしっかり聞いて応じるという基本がうまく機能していないことも一因と考えられます。

ワーキングメモリーは記憶力と関係がちなのですが、メンタルコントロールという一面もあり、注意力、集中力に加えて情報処理能力も関係しています。

処理速度の指標が極端に低かったり間違いが多かったり

行とぼしがある場合は、視機能や眼球の動きなどの困りが想定されます。

知能検査だから知能指数を割り出せばいいのではなく、実は、その結果を分析して、子どもたちのプラスになるように助言していきたいのです。心理師や心理士は検査屋ではないと書きましたが、心理師の心理師たるゆえんは、分析、助言にあると言ってもらいと思います。ただその場合に、日常生活での本人の困りが少しでも分かっていると、より踏み込んだお話ができるのではないかと思います。

さて、今年度かわらせていただいたお子さん達に対して、私は役に立つアドバイスができたのでしょうか。おそらく不十分であったらうなと思いつつ、検査場面でのお子さんの様子を思い返しています。そして改めて責任の重さを痛感する日々でもあります。必要な子に必要な検査を、そのためには日々のかかわりと観察が欠かせませんが、検査場面だけでなく継続した支援と一緒に考えていけるようになると嬉しいですね。

お知らせ

場所等変更しています。

。二月のセンター親の会は、ソフトピアセンター 11階です。
(スイートピアセンターは休館日)

。いきいきもり、不登校保護者会 1/21は11階7

。ピアサポート会は1/18(変更しました)9階6